



『道』ろうあ運動を支えた人びと
 一般財団法人全日本ろうあ連盟
 本体1500円+税

手話通訳者とのつながりが、障害者問題とのつき合いの始まりでした。『みんなのねがい』とのつき合いも30年近くになります。私はとくに耳の不自由な人びと（ろうあ者）とのつながりが深く、長崎の被爆ろうあ者をモチーフに『ドンが聞こえなかった人びと』、ろうあ運動を支えた人びとを取材した『道』の写真集があります。

ろう者は長い間、差別に苦しんできました。家族のなかでさえ話もできず、教育においても彼らの言葉である手話で授業を受けることさえ保障されませんでした。社会に出れば、仕事も十分に与えられず、低賃金のなかで苦しんできました。

ろう者の権利と生活を守る「ろうあ運動」は基本的人権の尊重、国民主権、平和主義を定めた新しい憲法のもとで育った新しい活動家によって大きく前進することになります。

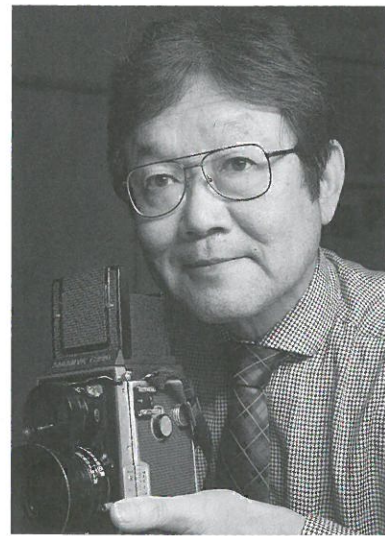
1965年、京都ろう学校高等部で「学校は学生の意見を聞いてほしい。わかる授業をしてほしい」と生徒がストライキをしました。翌年の耳の日に、ろうあ協会とろう学校同窓会は共同で3・3声明を出し、ろう者の人権宣言をおこないました。1966年の全国ろうあ青年研究討論集会で「健聴者にかわいがられるろうあ者になれ」と訓示したろうあ連盟の理事長に、若者たちは大いに反発し、その後、組織の中核となり権利を前面に押し出す運動をすすめていくことになりました。この頃が、ろうあ運動の大きな転換点ではないかと考えています。



河合洋祐さん

写真集『道』でとりあげた一

写真集『道』でとりあげた一



レンズを通して 障害者につながる

写真家 **豆塚 猛** さん

人、故・河合洋祐さんは15歳で脊椎カリエスになり、青春時代は激痛のベッド生活でした。治療のストレプトマイシンの副作用で、耳が聞こえなくなりました。彼を孤独から救ったのは手話と耳の聞こえない仲間の存在でした。ろうあ運動に邁進するなか、埼玉県のろう重複障害者の生活施設「ふれあいの里」建設に心血を注ぎます。その活動は漫画家、山本おさむさんの『どんぐりの家』のモデルにもなりました。

大阪のろう弁護士、松本晶行さんは小学校3年の時、流行性脳脊髄膜炎にかかり、耳が聞こえなくなります。苦学して弁護士となった松本さんはろうあ者の運転免許裁判をたたかうことになります。最高裁まで争われた裁判には敗訴しましたが、裁判をたたかったことで、ろう者の免許取得への道が開かれることになりました。

手話と仲間へ導かれてろうあ運動に入っていった人びと。『道』はろうあ運動に邁進した人びとへの私からのラブレターです。

まめづか たけし / 1955年、奈良県生まれ。1983年から京都でカメラマンとして勤務。1985年からフリーランスとなり、障害者福祉関係の仕事も手がける。出版物に『ドンが聞こえなかった人々』、『手話知らんですんません』（かもがわ出版）などがある。